

九、即得往生住不退転

願生するもの

一切衆生は十方諸仏に於いて讚嘆せられるところの法界に具体的なる名号を無我に聞信することによりて、信心成就し歡喜して救われる。しかしてその信心成就の一念こそは、此岸の生死を離れて、理想の浄土に向つて旅立つてゆく、その初一念である。其の名号を聞くと、生死の現実がありつつ、彼岸の浄土の全てを受け取り領解することである。随つて念仏行者の歩々声々の全ては、彼岸よりのものによつて、彼岸に向かつて生きるのではない限り、念無礙光如来の意が願生彼国だと言ふことは成り立たない。

願生彼国と言ふことは、衆生の上に成就しても、衆生によつて可能なのではない。これ願生の願は清淨願往生心であつて、衆生の汚れたる貪欲ではない。永久に煩惱ならぬ心である。

されば、念無礙光如来、即ち、聞其名号信心歡喜の世界に於て彼岸の徳を、如来の本願力によつて受領するが故に、彼国への願生の一道は貪瞋二河の間に展開されるのである。されば念仏者は、三毒を超えて清淨なる如来本願に生かされるものであり、それ故に不退転に住するのである。

即得往生

「即得往生 住不退転」の文を聖人釈して曰く、

「即得往生は信心をうればすなはち往生すといふ。すなはち往生すといふは、不退転に住するをいふ。不退転に住すといふは即ち正定聚の位に定まるなり。成等正覚ともいへり。これを即得往生といふなり。即はすなはちといふ。すなはちといふは時をへず、日をへだてぬをいふなり。」(唯信抄文意)

以上の文に明らかなるが如く、即得往生とは「信心をうればすなはち往生す。」ということである。「すなはち往生す。」ということとは、「すなはちといふは時をへず日をへだてぬ」ことであり、聞信の一念に正定聚の位に定まることである。故に「即得往生は信心をうればすなはち往生すといふ。すなはち往生すといふは不退転に住するをいふ。」と説かれるのである。

『執持抄』には「平生のとき、善知識の言葉の下に帰命の一念を獲得せば、そのときをもて娑婆のをはり臨終とおもふべし。」ともあり、又和讃には、「金剛堅固の信心の さだまるときをまちえてぞ 弥陀の心光照護して ながく生死をへだてける。」と讃えられてある。これ皆、如来の本願力、凡夫迷情の業障を断滅して、金剛の信心を成就する一念に、一念の信力よく生死を離れて、不滅の白道に生きあがる時を、即得往生と語られたものである。けだし、この現生不退、平生業成、現生正定聚の主張こそは、我が聖人の宗教の重要な特質であらねばならない。

我が聖人は、明らかに己が機の眞実を諦観して、「いづれの行もおよびがたき身なればとも地獄は一定すみかぞかし。」と仰せられ、又、愚禿と名告られた方であつた。

宗教の世界に於ては、あくまで一切衆生の無明流転の相を自己に於て発見し、生死界の眞実相を我が自証の世界に於て体感深信すべきことを求め、その内に識藏する無明煩惱を智慧光によつて照破して、無有出離之縁の眞相に覚めさせずにはおかない。そこに微塵のごまかしを許さず、ありのままの相を信知せしめて、愚悪の凡夫として大地に合掌すべきことを必然に求める。

しかしながら、愚悪の凡夫であるということは、尊きものを拒まれるということではない。否むしる罪悪深重煩惱熾盛であるということが、聖なる力を発動せしめたる根本因であり、愚悪に覚めることが尊くも聖なるものの全てを領受する契機である。されば人間の謙虚さにおいて至り極まれる聖人は、同時に人間に与えられた権威に於て、尊厳に於て、その人格的価値に於て、亦絶対的なものを遠慮なく自己の上に肯定された第一人者であった。「念仏者は無礙の一道なり。そのいはれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし云々。」

これ念仏道の権威の前には、天神地祇も魔界外道も拝跪せねばならなかった。「しかれば弥勒に同じ位なれば、正定聚の人は如来と等しとも申すなり。浄土の真実信心の人は、この身こそあさましき不浄造悪の身なれども、心は已に如来と等しければ、如来と等しと申すこともあるべしと知らせたまへ。」

と末燈抄にはあり、聖人は喜んで、華嚴經の「信心歡喜者 興諸如来等」(信心歡喜する者は、諸の如来と等し)の文を引用せられた。これらは全て念仏行者の持てる功德と尊厳とを現わされたものである。

もし宗教的信念にして、至れる謙虚なく、自己を知ることなく、愚悪の深信なくして、いたずらにその人格的評価を誇張せんか、これ全く迷信に外ならない。然れども、ただ己のあさましさを歎き、いたずらに卑下して、何等の人格的価値の發揮成就がないならば、これ又純正なる宗教ではあり得ない。

我等は、聖人の宗教に於いて、この二面の完全なる相即一致を見るのである。「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫」との機の深信が、「決定して深く彼の阿弥陀仏の四十八願は、衆生を撰受す。疑ひなく慮りなく彼の願力に乗じて定んで往生を得と信ず」ることを必然的に可能ならしめるのである。正定聚不退の菩薩であることが、愚禿なり、との信知を拒みはしない。2地獄一定の諦観が、即得往生 住不退転と矛盾するのではない。信心の人は如来と等し、と主張するまが、罪悪深重の衆生である。

これ全く他力大信心の不可思議なる感銘である。価値と反価値との揚棄こそは、信心の智慧の世界である。

最高の理想

「設ひ我仏を得んに、国の中の人天定聚に住し、必ず滅度に至らずば正覚を取らじ。」

これは、第十一願、必至滅度之願である。この必至滅度之願こそは、我が聖人をして証巻を開かしたるものである。聖人は、証巻の巻頭において、

「然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚之數に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。」
と千古の断案を示された。

「設ひ我仏を得んに、国の中の人天」、国中の人天とは、浄土の人、即ち彼岸の菩薩衆でなければならぬ。然るに聖人はこの「国の中の人天定聚に住し」の文を、現実人生にまでおよぼして、信心の行者を正定聚に住する人とせられた。即ち、念仏の行者は、現実生死の中にありつつも、浄土の大衆となれるものである。生死界にありつつ、浄土の徳、如来の本願力に生かされるものである。浄土の内眷族として、莊嚴浄土の聖業に参加せるものである。

「然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚之數に入るなり。正定聚に住するが故に必ず滅度に至る。」

念仏行者は本願を領解して信心決定するが故に、大乘正定聚の位に住する。大乘正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。即ち無上大涅槃の仏果に至るのである。この正定聚より滅度への歩みこそ、「願生彼国」の文字が示す行者の生活ではないか。我等は、大胆にも、疑慮なく人生の現実に大乘正定聚を肯定したまえる聖人の信境を崇仰せずにはおられない。何故なれば、第十一願こそは、如来の衆生に実現せんとしたまう如来の究竟的な願であるが故である。

「然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌……」とは、法界に何もの尊さをも実現しない、否それよりも、地獄と餓鬼と畜生以外には、造り能わぬものことである。この煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌こそ、しかしながら、五劫思惟の最初において、大悲の胸中に抱かれ、大悲を發起せしめるものである。悲痛なる六道輪廻の衆生は、法界唯一の真実に反逆して業苦を深める。にもかかわらず、その毒刃を大悲の胸中にうけて、衆生の現実を我が現実として抱いて「地獄、餓鬼、畜生あらば正覺を取らじ」と、思惟の一步をふみ出したもうた。本願の基調は実に、衆生の三悪道の悲痛にある。しかしながら大悲は何時までも、衆生の悲痛に大悲するのみではない。必ずそこには、この煩惱成就の凡夫の上に、尊き道を成就し、高き徳を、不滅の光を成就せずばおきたまわぬのである。これ即ち、救いの意味であり、本願の真意でなければならない。

憶うに、第十一願、必至滅土の願の内容たる、正定聚の菩薩位と滅度の仏果とは、如来の願心における唯一絶対のものでなければならぬ。如来莊嚴浄土の本願は唯、浄土の内眷族を成就することによってのみ可能であり、正定聚の人と滅土に至れるものとは、誠にかかる莊嚴浄土の願に生かされるものである。であるから、正定聚より滅度に至る行者は、真に法界に於ける最も尊きものでなければならぬ。如来五劫思惟の基調は、「地獄、餓鬼、畜生」の悲痛にあり、その究竟願はかかる業苦の衆生をしてついに「定聚に住し必ず滅度に至ら」しむる³にあつた。

聖人の「然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌」とは、衆生の現実であり、「往相廻向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚之数に入るなり。正定聚に住するが故に必ず滅度に至る。」とは、如来最高理想の実現せられたる相である。

即得往生

一切衆生は、本願名号のいわれを聞き、信心歡喜の一念に救われて、即ち往生する。即ち往生するとは、正定聚不退の位に住する身となることであつた。而して正定聚に住するものは、必ず滅度に至る。滅度に至るとは、弥陀同体の大涅槃を証して仏果に至ることである。不退転とは、この大涅槃の仏果に至るまで不退転であるということである。

古来浄土教は、娑婆において即身成仏することの不可能なることよつて始まり、有仏の国土に至つて修行成仏せんとすることより求められたと言われる。それであるが故に、兎にも角にも、浄土に往生して後、修行して証果を成就せんとする傾向強きが故に、往生に急いで成仏の問題はこれを重大視せられなかつた。しかるに我が聖人は、往生を直ちに成仏とせられた。彼岸への往生は直ちに成仏であるが故に、したがつて、現実人生に於て、必ず正定聚に住する身とならなければならない。正定聚とは、必ず成仏すべき菩薩位であり、正定聚のもののみ滅度に至るが故に。

かくてこの本願成就文の「即得往生不退転」の文こそは、本師聖人をして、現生に不退転を体解し、肯定せしめたる教証であつた。

前に述ぶるが如く、第十一願に於て如来は「設ひ我佛を得んに国の中の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずば正覚を取らじ。」と誓いたまい、聖人は「然るに煩惱成就の凡夫、生死罪濁の群萌、往相廻向の心行を獲れば、即の時に大乘正定聚の数に入るなり。正定聚に住するが故に、必ず滅度に至る。」とその領解を述べられた。

これ全く第十八願の世界に於ける一念大信決定の絶対的自証の告白である。而して、かくの如く十八願の清淨真実なる信樂を以て、十一願の正定聚の世界に入るものとなしたもうたのは、この成就文の「即得往生 住不退転」の文であるが、更にそれをより一層明瞭ならしめたものは、第十一願成就の文であらう。文に言く、

「其れ衆生有りて彼の国に生れる者は、皆悉く正定之聚に住す、所以は何ん。彼の仏国の中には諸の邪衆及び不定聚無ければなり」と。

衆生有りて、名号を聞信して、彼の国に往生する者は、皆悉く正定聚の位に住する。これ彼岸の世界の何たるかを示すものである。即ち彼の国は、仏徳の輝きたまう本願成就の国土である。されば「所以は何ん。彼の仏国の中には、諸の邪衆及び不定聚なければなり。」と、彼岸は、本願にそむける邪定聚の人、不定聚の人のあり得ないところであることを示されたものである。

邪定聚とは、聖人の見解によれば、第十九願の人、凡夫定散自力の雑善によつて彼岸に至らんとする人のことである。自力疑心の人であり、己が善根をたのみ、名号さえ、諸善とならべて同価値に見る人である。不定聚とは二十願の人であつて、諸善の成就し難きを知り、本願の名号をたのみといえども、「定散の専心」と言われるもので、聖人は化土巻に、「定散之専心とは、罪福を信ずる心を以て本願力を願求す、是れを自力之専心と名くるなり。」と言われ、又、

「凡そ大小聖人、一切善人、本願の嘉号を以て己が善根と為るが故に、信を生ずること能わさず、仏智を了らず、彼の因を建立せることを了知すること能わざる故に報土に入ること無きなり。」

と仰せられた。以上によつて明かなるが如く、不定聚の人とは、彼の国が本願を因として建立せられたことを知らない。即ち本願を領解することが出来ない。それ故に「信を生ずること能はず、信心なきが故に、罪福を信ずる心、即ち貪欲の功利的な心がすたらず、「本願の嘉号を以て己が善根と為る」者である。この自力がすたらない限り、遂に「報土に入ることなし。」と言われるのである。これ誠に、二十願不定聚の人である。不定聚の人は、進んで第十八願に転入すれば、自力を棄て、正定聚の人たるべく、逆転すれば十九願の邪定聚となるであらう。邪定、不定、共に定散自力のすたらぬ人であり、疑惑を持てるものである。かかる人は浄土に入らぬものである。これ、十一願成就の文に、

「其れ衆生ありて彼の国に生れる者は、皆悉く正定之聚に住す、所以は如何。彼の仏国の中には諸の邪衆及び不定聚なければなり。」

と、浄土に邪衆及び不定聚なきことを示されたのである。この浄土に邪定聚及び不定聚なきことを示されたことは、同時に、邪定聚及び不定聚が、浄土に到ること能わざることを示され、正定聚の人のみ、浄土に到り得ることを現わされた文となるのである。されば、浄土に必ず往生する念仏の行者は、現生に必ず正定聚に住するのである。これ聖人をして現生に正定聚を肯定せしめねばおかなかつたのである。

最高価値の実現

真実の念仏行者は、如来本願さながらに生かさされ、本願の真実に目覚め、一念信心歡喜して、願生彼国と彼岸に向つて旅立てるものである。彼は現前に白道を彼自身の上に顕現して、それに乗托して、浄土に往相するものである。大自然の母の懷に帰らんとして、芽を切り枝を出し葉を茂らせて、花を咲かしむる草木が、そのまま大自然の親を顕現するが如く、親の国に向つて出發し、親を憶念して生きる念仏の衆生こそは、親、即ち如来正覺の華より化生して、如来淨華の衆となれるものである。されば念仏の人は、たとえ生死海にありとも浄土の人である。浄土の全てをこの世に生きるものである。

「設ひ我仏を得んに、国の中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らざれば正覺を取らじ。」

第十一願の国中の人天の文字は人生にまで延長せられて、念仏の行者は、生死海にありつつ、国中の人天、浄土の人となれるものである。法界の最高価値の実現せられたる人である。信一念に如来の全てを回向せられ、やがて歩一歩、名号の徳を發揮し顕現するものである。名号の功德大宝海こそは、諸仏にあつて増さず、衆生にあつて減ぜざる、真如一実の功德宝海である。されば、聖人は、念仏行者を以て、菩薩の最高、五十一段補処の弥勒と同じとし、又大胆にも諸仏同等と断言せられたのである。

不退転

真実信心の行者は不退転である。現実の行歩に於て不退転であり、それ故に仏果菩提に向つて不退転である。龍樹菩薩は已に易行品において、

「若し諸仏の所説に易行道にして疾く阿惟越致地(不退転地)に至ることを得る方便有らば、願はくは為に之を説きたまへ。」

と問題を提出して、現生に不退転地を得る易行道を求めたまい、やがて、「是れ乃ち怯弱下劣之言にして、是れ大人志幹之説に非ず。汝若し必ず此の方便を聞かん」と欲すれば今当に之を説くべし。仏法に無量の門あり。世間の道に難有り易あり、陸道の歩行は則ち苦しく水道の乗船は則ち楽しきが如し。菩薩の道も亦是の如し。或は勤行精進のもの有り、或は信方便の易行を以て疾く阿惟越致地に至る者有り。」

と、易行の信方便によつて、不退転に至る道あることを示し、やがてその信方便の易行を説いて、

「若し人疾く不退転地に至らんと欲は、恭敬心を以て執持して名号を称すべし。」と教えたまうたのである。「執持して名号を称する」とは信じて念仏することである。ここに初めて易行信方便の不退転地は開かれたのであつた。

誠に生死を解脱して仏道成就せんとする菩薩にあつては、現生に不退転地を獲得するといふことこそ、菩薩の第一義の問題であり、必須の一大事因縁である。初歡喜地の菩薩は、再び仏道に於て退転せざるものであり、歡喜多きものであると説かれる。

「初地を得る必定の菩薩は、諸仏を念ずるに無量の功德有り。」

念仏の行者は、諸仏を全うしたる弥陀を念じて無量の功德を獲るものである。されば「恭敬心を以て執持して名号を称すべし。」と教えたまうたのである。念仏行者は仏の本願力によつて、正定聚不退転地に至るのである。

噫。三悪道を成就する悪逆の凡夫も、齊しく弥陀の本願海に回心帰入することによつて定聚に住し、本願力によつてよく不退転地に住するのである。悪逆の凡夫、救われざるべからず。一念救われたる信心の行者は、決定相續せざるべからず。信心に無量の功德を具し、一切の無明を滅すが故に正定聚に住して、やがて滅度に至る。念仏し求道して、不退転に一道を浄土にむかつて往生する者こそは、真に如来本願力によつて生れたものである。